有島武郎研究

―著作集第十輯『三部曲』をめぐって―

宮野光男

一

有島武郎著作集第十輯『三部曲』〔大8・12〕に関しては、すでに述べてきたところであるが、[註1] この度は前号[註2]に続いて、著作集とそれに掲げられているエピグラフとの関係において、それが『三部曲』所収の三つのドラマの解釈―主題追求―にいかなる可能性をもたらすか、という問題について、

①有島のホイットマン解釈の観点から、②一般的ホイットマン詩解釈の観点から、考察してみたいと思う。

また、収録されている三つの作品のうち、とくに三番目の「聖餐」に関わる新事実を紹介しながら、有島が「聖餐」について自註でいうところの、〈私は聖書の解釈にある新しい考へ方を試みようとした〉〔『聖餐』大10・2〕ということが、何を意味しているのかをあらためて考察してみたいと思う。とくにこの問題については、マグダラのマリアを取り上げること自体が一種の〈新しさ〉であると同時に、そこに有島の聖書理解と女性像形象の独自性を見ることができることを実証してみたいと思うのである。

＊

著作集第十輯『三部曲』のエピグラフとして掲げられているホイットマン詩は、

"—Only a few hints — a few diffused, faint clues and indirections,／I seek, for my own use, to trace out here"〔When I Read The Book〕

である。参考までに有島訳を以下に掲げておこう。〔エピグラフとして引用されているのは後半の《　》内の部分である。〕

私が有名な伝記を読むとき、／而してこれが（と自問自答する）著者が一人の人間の伝記と呼ぶところのものなのかと。／而してそのやうに、誰かゞ、私が世を去つた後、私の伝記を書くことだらう。／（恰かも誰かゞ私の生活のちよつぴりでも本当に知つてゐたかのやうに、／所が屢考へることだが、私自身すら自分の本当の生涯を完全に知つてはゐないといつていゝのだ。／《唯僅か

ばかりの暗示――僅かばかりの散漫な、かすかな示唆、／それを私は、私の用途の為に、こゝに書き記さうとするだけだのに）》〔『ホキットマン詩集』第一輯　大10・11〕

この詩が『草の葉』に加えられたのは、一八六七年、第四版出版のときであったと言われているが、この詩は、伝記的事実に関する理解困難さを表出するための詩として扱われているだけでなく、ホイットマンという存在そのものの内面性に関わる理解不可能性の、いわば象徴的表現として位置付けられているようである。[註3] たとえば、「若き日の有島武郎とホイットマンの詩」の冒頭の部分にエピグラフのかたちで引用されているのも、その一例であろう。[註4]

V.K.Chariによれば、ホイットマン詩「ぼく自身の歌」二五節、〈いま直ちに間断なくぼくがぼくの内部から日の出を送り出して対抗できねば、／日の出は見る見るうちにぼくを目くるめく光で容赦なく絶命させてしまうだろう〉[註5]や、〈ぼくの最後の美徳だけは君にもやれぬ、本当のぼくを手放すことはお断りだ、あまたの世界を包囲するのは結構だが、ぼくを包囲することだけはやめるがいい、どんなにお世辞たらたら君が口説をつくしてもぼくがちょっと君のほうを見るだけでとたんにおい散らされてしまうからだ〉〔同前〕をあげて、ホイットマンの光輝性が彼自身の内部から発するものであり、彼の超絶性は、通常の想像力をもってしては、計り知ることのできないものであることを述べて、さらに、このエピグラフに掲げられている詩を通して、人間の真実の生活は、その本質において超絶的ものであり、経験主義をもってしては、理解不可能なものであることを述べている。

もっとも、Chariは、そのあとで、思考に対しては超絶的ではあっても、それは不可知なのではなく、直接的に内在する真実に対する経験の問題であることを指摘し、推論の問題ではなく、直接的な確かさをその基盤に置くべきであることを述べている。

このようなホイットマン理解のしかたは、一般的のようである。[註6]

先に触れたChariの文章はさらに続いて、「回転する地球の歌」の一節、〈事実も、宗教も改善も、政治も、商売も、相も変わらず真実だが、／しかし魂もまた真実であり、これまた明確で率直であり、／理屈や証明で出来上がったものではなく、／否定しがたい成長がしっかりと土台を据えたもの〉[註7]に触れながら、ホイットマン自身が〈君らはるかかなたを探すつもりか、ついにはきっと戻ってきて、／知りつくしているもののなかに最善のものを、あるいは最善に劣らぬものを見出すだろう〉[註8]とうたい、さらに、それは〈遠くはないんだ、足をのばせば行けるところさ、おそらく君は生まれてこのかたあの道を歩きただそのことを知らなかっただけなのさ、／おそらく水のうえにも陸の上にもどこへだってあの道は通じている〉〔同前〕と、ホイットマン追求が、つまり真実の追求が、外部的追求にゆだねられていることではなく、宇宙それ自身の内部に潜んでいるものの認識にかかっていることをよく知っている存在であることを述べている。このホイットマン理解は、有島のホイットマン理解と本質的に一致していることは、「ホイットマンに就いて」〔大9・11〕、「ワルト・ホキットマン」[註9]〔大12・2〕などにおいて明らかであり、すでに言及してきたことである。

この、いわば〈非正解性〉あるいは〈匿名性〉ということのできるホイットマン理解の仕方は、あるいは、ホイットマンに託されて表現されようとしている、人間性の内面に隠された部分の発見の、一種の契機として位置付けることができるように思われるのである。

*

「或る女」に付けられたエピグラフ解釈のひとつの可能性として、〈ホイットマン〉に〈キリスト〉の面影を見ることを、有島の隠された希望として見たが、[註10]『三部曲』のこのエピグラフは、その意味で「或る女」の延長上に位置しているもののように思われる。

ホイットマンをローファーの一人としてみる文脈から、ただちにそう規定することは、「ホイットマンに就いて」の有島の記述からも可能であるが、作品理解のうえからは、直線的につながる、人間イエスの可能性を超えたものへの憧憬を、先に述べた〈非正解性〉、あるいは〈匿名性〉の表明であるエピグラフに見ることができるのではないかということなのである。

吹田順助あての書簡によってこの『三部曲』に収録されている三つの作品が〈関係を有たせようと試みた〉〔大9・1・19〕ものであることは周知のことであるが、その〈関係〉は、〈一、エホバ(義)より「父なる神」(愛)への推移。二、両性間の憧憬、争闘、調和。三、生命の向上、向下、及生命の自足。〉ということであった。

それぞれの項に含まれている否定性が、結果的には肯定性へと転化してゆく可能性は、第一項から第三項における、神と人間との調和が生命の充実をもたらし、そのことの顕現としての男女関係の成立をもたらすことへの期待が表明されているところであるが、すでに見てきたように、[註11]それぞれの作品において、ある一つの決定的な欠落が、そのことを不可能にしていたことを想起すべきである。その一つの欠落とは、人間が人間を超えることの可能性の欠落であった。

ヤペテもサムソンも、イエスですら、それぞれナアマを、デリラを、マグダラのマリアを、愛において、調和の中に自足せしめることはできなかったのである。あくまでも人間の愛にとどまっているかぎり、彼女たちの〈闇の認識〉は、払拭できないことを、マグダラのマリアの、〈おゝ世界が闇になつて行く……〉は、よく表していたのである。

そのような状況認識に対して、あえて、有島が求めた新なる可能性とは、いったい何であろうか。それは言うまでもなく、欠落を埋める可能性のはずである。

一切のことが判明してしまったとき、人間に残された可能性とは、〈判らない〉ものであるということは、〈暗示こそは人に与えられた子等の中、最も優れた娘の一人だ。然し彼女が慎み深く、穏かで、且つ容易にその面紗を顔からかきのけない為に、人は屢この気高く美しい娘の存在を忘れようとする〉〔「惜みなく愛は奪ふ」大9・6〕という有島の〈暗示〉説からも明らかであろう。そのことを考えるときに、エピグラフの解釈に積極的な〈不明性〉を示すところの〈非正解性〉、〈匿名性〉が関わってくるということは、示唆に富んだことであるように思われるのである。

先にも触れたように、このところで、有島のホイットマン理解の基本が、その理解不可能性にあったことを想起すべきところであろう。それは知的努力の欠落がもたらす理解度の不十分さではなく、人知を超えた存在への期待に対する一種の憧憬の表現なのである。

いささか先回りをした言い分にはなってしまうのであるが、『三部曲』の場合にも、「或る女」と同様に、作品とエピグラフとが、相呼応する関係の中で位置付けられるのではないかと思われるのである。つまり、作品の世界は、決定的に否定の世界が描かれており、エピグラフに懸けられた希望は、それとはまったく対称的な肯定の世界の示現だということなのである。

二

第一章において述べたように、「聖餐」に対する有島の意図は、自註に言う〈新解釈〉をもって、吹田順助に語ったように、作品自体のなかに、ひとつの解決をもたらしたかったにちがいない。ところが、〈これが私の旧衣を脱する最後のもの〉〔吹田順助宛書簡 大8・12・1〕と言わなくてはならなかったのは、その試みが失敗に終わってしまったからであって、本来の意図ではなかったはずである。

しからば、その〈新解釈〉とは何であったのかということになるが、吹田順助宛書簡〔大9・1・19〕、竹崎八十雄宛書簡〔大9・3・11〕、『聖餐』〔前出〕などの有島の自註に基づいて、それがマグダラのマリアに対する新しい見方であることを述べたことがあるが、その問題に対して、「聖餐」に関する新事実にふれながら、いささかの傍証を試みてみたい。

*

「聖餐」のマグダラのマリアを論じる場合、有島のマグダラのマリア体験は重要なポイントの一つであるが、アメリカ留学の初期に体験したニューヨークのマンハッタン座での、Mrs. Fiske 演ずるところの "Mary Magdalene" 観劇は、注目に値する出来事だったということができよう。

もっとも、このときの有島にとっては、関心のあったのはマリアではなく、むしろユダのほうであったようで、

同婦人〔Mrs. Fiske〕ノ Mary Magdalene モサルナガラ、最モ深ク感興ヲ引キタリシハイスカリオテノユダナリ。〔日記 明36・9・22〕

といって、ユダの内面に見られる〈非常ナル煩悶苦痛〉に対する同情は、〈余ノ所論ノ誤レルヤ否ヤニ係ラズ益其根底ヲ堅フセラル、ヲ覚ユルナリ〉というほどであった。

当時の有島が、マリアのみならずユダにこのような同情を抱いていたということは、人間追求への意欲の高まらざるを得ない状況にあった有島にとっては当然のことであったと言うことができよう。この思いは、大正八年、「聖餐」執筆の時に到って、〈あれは本当を言ふと如何にしても少なくともう一幕を加へ、マリヤを表面に置いて其生活を明らかにし同時に其幕にユダを点出してユダの心持ちも同時に表現しなければならなかつたものだと思〉〔吹田宛書簡

大9・1・19〕うと述べてはいるところにも受け継がれている、有島の基本的な考え方であるが、〈私は中心点を寧ろマリヤに置いて書いて見た積りでした。基督を精細に描く事によつてマリヤを浮き出させようと試みたのです〉〔同前〕というように、有島の本心はマリアに移っていることがわかる。

しかし、有島の〈マリヤの影が薄過ぎる〉という反省は、〈もう一幕を加へ〉ることのできなかったことからも明らかなように、結果としては生かすことができなかったのである。

その原因が、結局のところ、〈基督を精細に描く事〉ができなかったということになるのであるが、それが何故であるかといえば、そのためにマリアが果たさなくてはならなかった役割、〈このマリヤのみがキリストの心を朧げながら感じてゐて、キリストの死後、弟子たちが絶望の余り一人残らずキリストを離れ去つた時にも、一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止め〉〔『聖餐』〕るということが欠落してしまったということ、つまり、マリア像が有島の意図したものとは異なっていたということになるのである。

かつて、それは復活の証人としてのマリアを描くことができなかったことに直接の原因を見ることができると述べたことがあるが、(註13) そのことを明らかにするひとつの材料があるので、紹介しておきたいと思う。

明治四一年九月二九日、有島は日記に次のように書いている。

それから『マクダ』(Magda) を読んだ。全く不思議なことにこの芝居がアメリカで上演されたのを見たことをすっかり忘れていた。数ページ読み進むまで、アメリカで見たことを思い出せなかった。ズーデルマンが、イプセンはもとより、ハウプトマンとも同列に並び得るものでないということは正しい。〔原文英文〕

このところに言われている『マグダ』の作者がだれであるかについて、不明であり、したがって有島の日記における内容紹介が唯一のものであったが、この程、この芝居の原作が、ポール・ハイゼの「マグダラのマリア」であることが判明し、内容の比較検討が可能になった(註14)のである。

*

有島のなかにあったマグダラのマリア像は、有島のマグダラのマリア体験に基づいていることは言うまでもないことである。それは基本的には伝統的な、換言すれば聖書の記述に基づいたものであったに違いない。

したがって、もし、新しい可能性をその女性像のなかに付与することができるとすれば、それは、反聖書的な女性像を形象することになるはずである。

そのための人物造形上の方法としては、事柄は、大枠において聖書の記述の範囲のなかにあっても、それぞれの行為の背後にある異なった動機付けが問題になるところである。あるいは、その大枠のなかに位置付けられていながら、あえて異なった行為をなさしめなければならないということもありうることである。すべきことをしなかった、ということをも含めて、それは、作家有島の人物造形上

の特色のひとつに数えることができることなのである。

直接的にも間接的にも、イエスの復活の証人たりえていないということは、従来のマグダラのマリア像からすれば大きな変化なのである。ルナンの影響のもとに〈愛〉の力によるイマジネーションのなかでのイエスの復活の可能性は、解釈における新しさではあるが、それと同時に、それすらも表現することができなかったという意味で、二重の新しさを見出すことができるところなのである。

*

ところで、有島がアメリカで観たW・ウインター英訳の「マグダラのマリア」は、その序文によれば、原作に対して、その精神において〈human〉であり、〈compassionate〉ではあるが、精神性に欠け、詩的でなく、高尚さを欠き、肉感的すぎ、ユダの裏切りの動機を、捨てられた情夫の官能的嫉妬にしてしまっていることなどをあげて批判し、それに対して自分の訳は意訳であり、〈古代エルサレムにおけるヘブル人の生活描写やロマンチックな行動の物語を語るとともに、神の愛を信じることを通して、愛の影響を広めるとともに罪と苦悩を超えて勝利を得た人間の魂の勝利を暗示しようとしたのだ〉と述べている。したがって、ユダのキリスト離反は〈愛国者としての彼の願い、―ユダヤ人のローマからの解放―の成就者としての信頼の喪失が原因である〉とされているし、マリアは、〈ユダと恋人の関係にあったが、悔い改めと改心により、ユダとの縁を切り、キリストへの献身を決意した女性として描かれている〉と説明されている。

*

殊に基督が自分の死を窃かにマリヤに告げられ、基督の死後弟子達の中に起つた不安と絶望とがマリヤの予めの覚悟と熱意ニよつて救はれ、そこから基督の信仰が再生したと見る私のこの劇に於ける essential な考へ方はあの劇に於て相当に生きて描かれてはゐないかと私は思ふのです。而してこの事実が「聖餐」の重要な出来事だと思ふ私の考へハ一言に退け去るべきものではないと思つてゐます。〔竹崎八十雄宛書簡　大9・3・11〕

このように、有島によってマリアに託された期待は、いかにも大きいのである。しかし、本当に有島は、有島の戯曲において〈基督の信仰〉の〈再生〉が表現されたと思っているのかどうか、具体的にW・ウインターの訳と、有島の作品との比較をしながら検討してみたいと思う。

①構想

一、（エルサレムの神殿の前の広場）／二、ベタニアのラザロの家／三、シモンの家〔有島〕

一、マグダラのマリアの家の部屋／二、フラヴィウスの家の部屋／三、エルサレムの広場―そこから道が通じている／四、マリアの家の部屋／五、エルサレムの近く〔W〕

②登場人物

イエス・キリスト、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、シモン（マルタの夫）、マグダラのマリア（マルタの妹）〔有島〕

カヤパ、アウルス・フラヴィウス、クインタス、ハラン、ヨサム、ヨアブ、ガマリエル、シモン、ラケル、ミリアム〔W〕

③マリアの堕落の原因

貧乏故に、あなたの大事な最初の恋が裏切られたのが悪かつたのです……（マルタ）〔有島〕

一六才のおり、財産目当ての結婚をさせられた……三年間我慢をして駆け落ちをしたが、金がなくなると捨てられてしまい、その失意のどん底にあるときにめぐりあったのがユダであった…〔W〕

④イエスの死に対するマリアの態度

シモン！イエス様が……イエス様のお命が……。〔中略〕嘘です私の云つたのは皆んな嘘です。私は何を考へて云つてゐたのでせう。兄さんたち！　どうか気を落付けて下さい。おゝ恐ろしい事だ。〔中略〕イエス様は死を踏み躙られたのです。イエス様は限りなき命の持主でいらつしやる。もう大丈夫です。何事もないのです。落着いてゐて下さい。〔中略〕今私も落付きます。少し待つて下さい。……世に勝つたとはつきり仰有つたイエス様が……私は何を信じたらいいのだらう。……けれども主は信じろと仰有つた……（この頃よりマリヤは他の兄妹等の凝視の中に全く孤独なるものゝ如くなり、宛ら荒野の真中に立てるが如く独白す）主よ、信じさせて下さいまし。あなたが限りなく生き給ふ事を信じさせて下さいまし。……静に……静に……もつと静に……若し見る事が出来なければ……凡てが聞こえるやうに……おゝ世界が闇になつて行く……〔有島〕

もし彼がそれを約束したからには、彼は戻ってくるでしょう。この清らかな唇からかつて偽りのことばが語られたことはありません。彼は帰ってくるでしょう。彼は来たるべき力があるのです。私の魂を墓から生きかえらせた彼は、彼自身を死の縄目から解き放つことができるのです。彼は帰ってくるでしょう。私は彼に沢山聞きたいことがあります。私はあなたと一緒に行きましょう。彼が帰ってきたら大変幸せでしょうね。彼はあなたの家を知っています。私が彼に会ったのはそこでした。〔中略〕御覧なさい。神がそのしるしを空に現しておられます。彼は帰ってきますよ。〔W〕

この比較によって有島の作品の単純さを、そのひとつの特色としてあげることができよう。また、ユダについては、有島によっては彼の内面性の苦悩、主として政治的革命を基軸とした期待に焦点を絞って描かれており、愛と革命との板ばさみになって苦悩するユダとして描いているポール・ハイゼの方が、彼の〈自殺〉の必然性をよく表していることになるのである。

メーテルリンクの作品では、ユダは登場しない。その意味では原作であるポール・ハイゼの作品の方がより複雑な人間関係が描かれていることになるし、有島の作品に近いことにもなるが、ポール・ハイゼの作品も、メーテルリンクの作品も、マリアの苦悩が、ローマの高官によって、愛の選択を迫られているところに、共通点がある。イエスの生命との引き替えに、ローマ人の愛を受け入れることを求められたマリアが、結果としてはともにその愛を拒否すること

によって、イエスの死を自らの手で招いてしまうという、一人の人間としても、とうてい堪えることのできない危機状況を表現する存在として、位置付けられている。しかし、有島の作品には人間をとるか、神をとるかの選択に悩む者の姿としてのマリアは描かれていない。

人間であるかぎり、イエスを十字架の死においやってしまわなくてはならない内的必然性の事実に苦悩するマグダラのマリアには、人間としての否定性への決定的な自己認識がある。しかし、有島の描くマリアには、自らがイエス捕縛の直接原因としての位置付けはない。それに対して、ポール・ハイゼ、メーテルリンクの描くマリアの、

見よ　イスラエルの民よ！／彼を殺したのは私なのだ！――けれどもひとりでじゃない／もうひとりいるんだわ　復讐したらいいのよ／私たちを打ち倒す石はないの〔ポール・ハイゼ　第五幕〕

ここは二つの死があります、わたしは二つの死を手に持ってゐます。それは、この世へ生れて来た憐れな人間に取っては、余り重すぎます。……〔メーテルリンク　第三幕〕

このような否定性にもかかわらず、ポール・ハイゼの描くマリアは、先に述べたような〈彼はきっと帰ってきます〉というキリストの復活と再臨を信じる言葉を口にすることができる者として描かれ、メーテルリンクのマリアは、

若しわたしが、ほんの一瞬間でも、愛の重みに打ち負けたら、すべてあの方の云われたこと、すべてあの方の為られたこと、すべてあの方の与へられたことが、再び闇に沈んでしまつて、この世は、あの方の生れなかつた時よりも、一層物淋しくなり、天は永久に人間に対して閉じられてしまふに違ひない！〔メーテルリンク　同前〕

と、本質的な希望を持たしめているのであって、このところに、これらの作品に描かれているマリアと、有島の作品に描かれているマリアとの決定的な差を見ることができるのである。

＊　＊　＊

〈彼女は強い愛の持主であつた〉〔「聖餐」〕と有島は言う。そうであるが故に愛する者のなかに死をみることができたのである。ベタニヤのマリアを語る有島がそのことを述べている〔日記　明36・11・23〕ことについては、すでに述べたところであるが、[註15] 愛のなかに死を見なくてはならない世界とは、人間追求のプロセスにあっては、悲しいけれども新しい発見であるが、「惜みなく愛は奪ふ」において、〈愛の絶頂における死〉の論理を提唱しなければならなかった有島の愛の論理の淵源を、このところに見る事ができるという意味では、有島にとっては本質的にはけっして新しい発見ではなかったと言わなくてはならないのである。

有島の「聖餐」の目論見のなかに見られるマリアの、キリストの良き〈理解者〉としての役割は、人間の限界状況を示すという意味で、有島にとっては〈旧衣〉と言わざるをえなかったものなのであ

る。そのような事態に立ち到ったことを知ったときに、改めてエピグラフとして掲げられた詩の意味するものが、表現を越えて有島の魂に迫って来るものであることに気付いたにちがいない。「カインの末裔」のエピグラフ、「或る女」のエピグラフに明らかにされた愛の可能性のひとつが、いまここに「不明性」、「不可解性」によってその実現を表わさなくてはならなくなったことを知ることができると同時に、人間の不可能性のリアリテーの濃密化の進んだ姿として表現されていることを知ることができるひとつの手がかりなのである。

【註】

1・11・12・13　「『サムソンとデリラ』、『大洪水の前』論―『或る女のグリンプス』との比較を中心に―」、「『聖餐』論―椎名麟三『マグダラのマリア』との比較を中心に―」、「『三部曲』論」〔拙著『有島武郎の文学』昭49・6　桜楓社刊所収〕

2・10　「有島武郎研究―著作集第八・九輯『或る女』をめぐって―」梅光女学院大学「日本文学研究」第二十一号　昭60・11　所収

3　鈴木保昭『白樺派の文学とホイットマン』東京精文館　昭52・7

4　Whitman in the Light of Vedantic Mysticism　AN INTERPRETATION by V.K.Chari with a Foreword by Gay Wilson Allen　University of Nebraska Press

5　杉本喬、鍋島能弘、酒本雅之訳『草の葉』（上）〔岩波文庫　昭44・5〕

6　①亀井俊介「有島武郎とホイットマン」〔『近代文学におけるホイットマンの運命』昭45・3　研究社刊所収〕〈このようにして）生命の讃美、自我の宣揚、愛欲の情念、死や孤独などをうたった詩では有島の訳はかなり成功している。だがこれらどちらかといえば意志・感情をもととした詩とちがって、思惟をもととした詩は、訳した数も少ないが、訳しぶりも散文的になりすぎていることが多い。「私が書物を読む時」（'When I Read the Book'）などはそのよい例であろう。〔中略〕まことに拙劣無慚、ほとんど富田砕花的なまどろっこしさを再現しているといってよい。〔中略〕そしてその中の一部は、いわゆる「名訳」からはなかなかえられない魂の直接的な響きを、ごくぶっきらぼうな直訳体によることによって、原作から伝え得ていると私は思う。〉

②清水春雄「母のイメージ」〔『ホイットマンの心像研究』昭43・11　訂正版　篠崎書林刊所収〕〈彼は、「私自身でも自分の真の生活が判らないのに、伝記作家という人々が他人の生涯を書くなどとは、」僭越至極だという意味のことをうたっている。主観的な詩人として内的生活が重大な意義をもっているのであって、外部的な一生の記録などは問題にしていないという態度が首肯できる。〉

7・8　註5に同じ〔岩波文庫（中）昭45・8〕

9　「有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって（四）―」、「同―（五）―」、「同―（六）―」昭53・11～55・11　「梅光女

学院大学日本文学研究」第一四～一六号

拙著『有島武郎の文学』〔前出〕所収「或る女」論（二）の補註1において、原作がズーデルマンであると述べたが、これは誤りなので訂正しておきたいと思う。ズーデルマンの作品「マグダ」は、現代劇である。

原作者の判明については、北九州大学教授江頭太助氏に負うている。また、ニューヨーク市立図書館蔵のウイリアム・ウインター訳の英訳本の閲読については、本学英文科助教授今井夏彦氏の協力に負うていることを明記して感謝の意を表したいと思う。

なお、ポール・ハイゼについては『世界文学鑑賞辞典』〔昭37・10　東京堂〕によれば、〈一八三〇―一九一四〉有名な言語学者の子としてベルリンに生まれた。一七才でベルリン大学に古典言語学を学び、ボン大学で二二才のとき学位を得、後イタリヤに遊ぶ。二四才のときバイエルン王の招きでミュンヘンに移り、詩的リアリズムの代表的作家として文筆活動に専念する。一八八四年にシラー賞、一九一〇年にはノーベル文学賞を受賞した〉と紹介されている。また、訳者のW・ウインターについては、『英米文学辞典』〔第三版　昭60・2　研究社〕に、〈アメリカの劇作家。マサチューセッツ州出身。Boston Transcript に関係し、次いで New York Tribune の演劇欄を担当。一流の劇評論家として重きをなしたが、写実主義が理解できず、やがて時代に取り残された〉と紹介されている。

メーテルリンク作「マグダラのマリア」については、宗像和重氏が、「『三部曲』の位相―「旧衣を脱する最後のもの」について―」〔「日本近代文学」第二七集　昭55・10〕において、『三部曲』と〈モーリス・メーテルリンクの戯曲『マグダラノのマリア』（和気律次郎訳、大正九年三月、玄文社）と比較してもいいかもしれない〉と、大変興味深い指摘をしておられる。

このことは、メーテルリンクの作品に付けられた「作者のノート」、〈私はポオル・ハイゼ氏の戯曲『マリア・フオン・マグダラ』から、私の脚本中の二つのシチユエエシヤンの観念を借りた。即ち第一幕の終りにおける基督の干渉、彼がマリイ・マグダレエンに対して怒り狂うてゐる群衆を舞台の裏で発せられる『汝等のうち罪なき者先づ彼女を石にて撃つべし』といふ言葉で制する件と、第三幕で、偉大なる罪人が、彼女自らをロオマ人に委かせることを承諾するか、拒絶するかによつて、神の子を救ふか、滅ぼすかといふ窮地に自分を見出す件とである〉〔和気律次郎訳〕から明らかなように、三者の比較の意味を見出すことのできる関係を知ることができることからも云えることである。なお、氏の拠所とされた冬夏社版『マーテルリンク全集』第五巻（大9・12）〔鷲尾浩訳〕は、和気訳と、まったく同じ訳文である。

15　註1の「『聖餐』論」に同じ。

【追記】

本文中に引用した、V.K.Chari およびW・ウインター訳の英文については紙幅の関係で省略した。和訳は筆者の試訳である。